ヘンリーくんとアバラー

クリアリー作　　松岡享子訳　　ダーリング絵

933 Cleary, Beverly. (1916-)
(NDC)

ヘンリーくんとアバラー　クリアリー著

松岡享子訳

学習研究社　昭和43(1968)

189p　図　22cm　(ゆかいなヘンリーくんシリーズ2)

原題：Henry and Ribsy.

■この本についてのお問合せ，製本上のミスなどがありましたら，下記宛にお知らせ下さい。
学研「営業総務部サービス課」児童図書係　東京都大田区仲池上1—17—15 Tel.03—754—1111

ゆかいなヘンリーくんシリーズ・2
ヘンリーくんとアバラー
ベバリイ・クリアリー著

訳者　松岡享子
発行人　古岡秀人
編集人　石井和夫
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　篠崎製本株式会社
発行所　株式会社学習研究社
東京都大田区上池台四丁目四十番五号
振替東京一四二九三〇
8397-339-215-1002
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

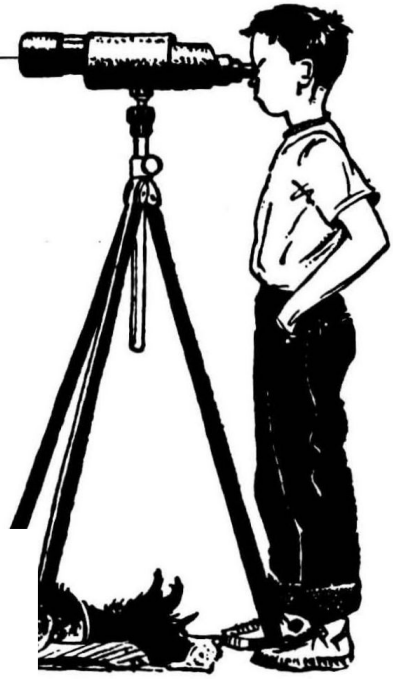
©1968

4604

ヘンリーくんとアバラー

ベバリイ=クリアリー作　ルイス=ダーリング絵
松岡享子訳

学研



ヘンリーくんとアバラー

もくじ

1 アバラーガソリンスタンドへいく ―― 7

2 ヘンリーと台所(だいどころ)のごみ ―― 35

3 ヘンリーのさんぽつ 70

4 ヘンリーの犬歯(けんし) 96

5 ラモーナとPTA 111

6 アバラーつりにいく 141

7 ヘンリーのぼうけん 168

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

HENRY AND RIBSY
by Beverly Cleary
Original English edition published
by Morrow, New York
Copyright 1954
Japanese translation right arranged
through Charles E.Tuttle Co. Inc., Tokyo

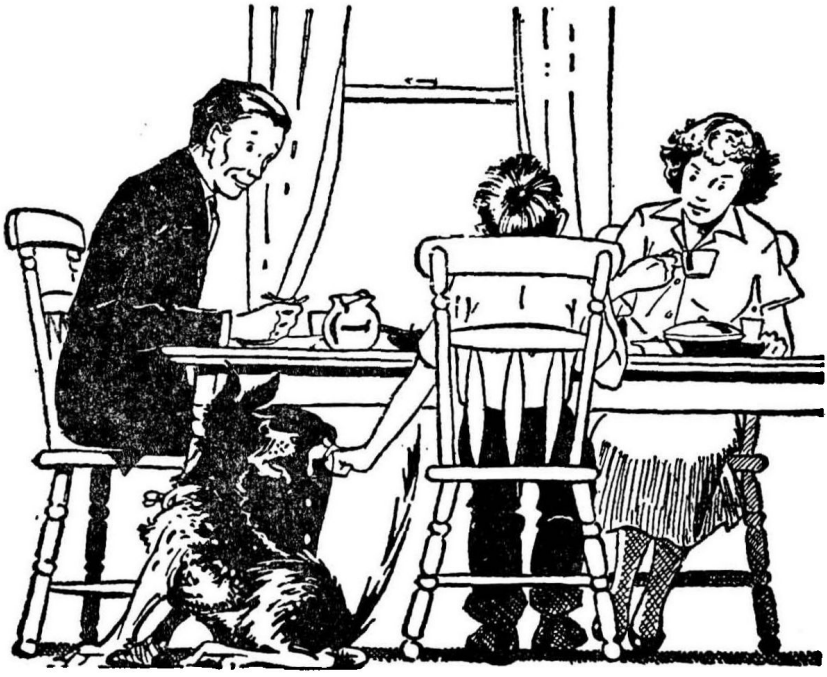
●

装丁デザイン
松本はるみ

HENRY
AND RIBSY

ヘンリーくんとアバラー

ベバリイ＝クリアリー作
ルイス＝ダーリング絵
松岡享子訳



1 アバラーガソリンスタンドへいく

八月のある暑い土曜日の朝、ヘンリー＝ハギンズは、おかあさんとおとうさんといっしょに、クリッキタット通りの白い四角い家で、朝ごはんをたべていました。

ヘンリーの犬、アバラーは、ヘンリーの足もとにすわって、なにかおあまりがもらえないかとまっていました。おとうさんとおかあさんは、ラジオの九時のニュースに聞きいっていましたが、ヘンリーは、なにか、きょうやれるおもしろいことはないかしらん、とかんがえていました。

もちろん、スクーターとキャッ

チボールをしてもいいし、自転車でロバートのところへいって、いっしょに鉄道の模型をつくってもいいのです。でも、そんなことは、いつだってできます。きょうは、なにかかわったこと、いままでにいちどもやったことのないことをしてみたいと思いました。

ヘンリーが、まだなにもおもしろいことを思いつかないうちに、ニュースがおわり、アナウンサーにかわって、四人の男の人がうたいはじめました。ヘンリーは、毎土曜日、この番組を聞いているので、いっしょになってうたいました。

ワン、ワン、ワンワン印。
ドッグフードは、ワンワン印。
肉はたっぷり、味いちばん。
さあさ、いますぐ
おもとめください、
あなたの犬に。
犬はごきげん、
ワン、ワン、ワーン！

そのあと、ラジオから、犬のほえる声が聞こえました。

「ウーウーウー、ワン！」

アバラーがラジオを見てほえました。

アナウンサーの声が、わってはいって、

「おたくの犬は、家族の一員ですか？」と、ききました。

「一員でーす！」と、ヘンリーは、ラジオにむかってどなりました。「こんないい犬は、ほかにはいないもん。」

「ヘンリー、後生だから、音小さくしてちょうだい。」と、おかあさんが、自分のコップにコーヒーをつぎながらいいました。「ああ、そうそう、いい犬で思いだしたけどね、ヘンリー。アバラーったら、グリーンさんとこのお庭で、おばさんがうえたばかりのしばふの上を走りぬけたんですってよ。アバラーのとおったあとが、ずうっと、大きなあなぼこになったって、おばさんいってらしたわ。」

「ちぇっ。アバラーは、なにもあんなぼろしばふなんかあらすつもりはなかったんだ。ただ……」

そういいかけて、ヘンリーは、あのときアバラーは、グランビーさんとこのネコをおっかけていて、しばふを走りぬけたのだということを思いだしました。それで、「ただ、いそいでただけだよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

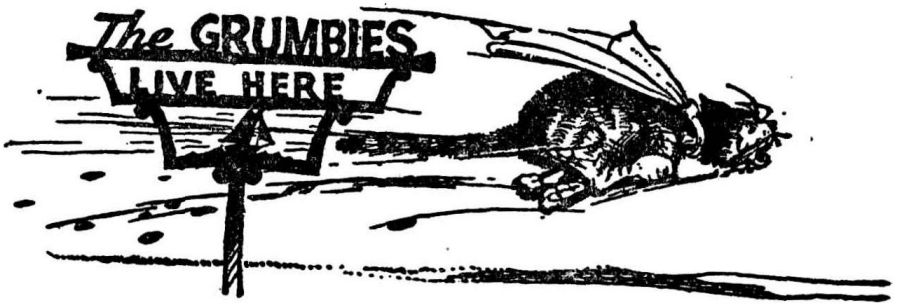
と、ごまかしました。「おまえは、いい犬だよな。そうだな、アバラー。」

しきものの上で、アバラーのしっぽが、タン、タン、タンと、なりました。

「うちではいい犬だと思っていても、うえたばかりのしばふの上を走りぬけたり、ネコをおいまわしたりするようじゃ、ご近所の人は、そうは思わんだろうよ。」と、おとうさんがいいました。

ヘンリーは、はっとして、おとうさんを見ました。そして、おとうさんは、どうして、アバラーが、グランビーさんとこのネコをおっかけるのを知っているのだろう、と思いました。それと同時に、しばふのことは、なにもアバラーがわるいんじゃない、と思いました。だって、いちばんはじめにしばふをよこぎったのは、ネコじゃありませんか！

「けど、とにかく、アバラーは、夜なかにほえて、近所じゅうをおこすようなことはしないよ。このちょっとさきのうちのコリーみたいにさ。」と、ヘンリーはいいました。



「どっちにしても、注意したほうがいいぞ。アバラーが、ご近所のやっかいものになるのはいやだからな。」

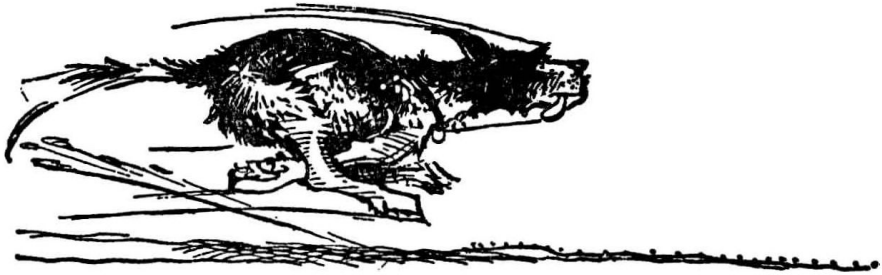
おとうさんは、そういうと、ナプキンをおさらのよこにおきました。

「さて、車をガソリンスタンドへもっていって、グリーズアップ（車をもちあげて、車体の下部についているハンドル連結機に、潤滑油をさすこと。）してもらってくるか。」

それを聞いて、ヘンリーは、いいことを思いつきました。チャンス到来。これこそ、いままでにいちどもやったことのないあること、おとうさんが車をグリーズアップにもっていくたんびに、いつもやってみたい、やってみたいと思っていたあることをやる絶好の機会です。

「わあーい、じゃあ、ぼく……」といいかけて、ヘンリーは、口をつぐみました。もしかしたら、おかあさんが、そんなことといけないというかもしれないと思ったからです。いまいわないで、ガソリンスタンドについてから、おとうさんにたのんだほうがよさそうです。

「ぼくもいっしょにいっていい？」と、ヘンリーはいきおいこんでたずねました。



「ああ、いいよ。」と、おとうさんはいいました。「ついておいで。」

「ドッグフードは、ワンワン印。」ヘンリーは、うたいながら、アバラーといっしょに、車の前の席に乗りこみました。ヘンリーは、シートのまん中、おとうさんのとなりにすわりました。まどから首を出して、いろんなおもしろいにおいをかぐのがすきなアバラーを、まどぎわにすわらせてやるためです。

ヘンリーは、たとえすぐそこのガソリンスタンドまででも、おとうさんといっしょにどこかへいくのは、うれしい気がしました。おとうさんとふたりきりでいると、いつも、なんだか自分が大きくなったような、おとうさんと、男と男のつきあいをしているような気がしたからです。ヘンリーは、おとうさんが、もっとたびたび、自分をどこかへつれていってくれたらいいのに、と思っていました。

ガソリンスタンドへいくとちゅう、花園スポーツ用品店の前をとおりました。店のウィンドウには、テニスのラケットやら、ゴルフのクラブやら、つり道具やらが、いっぱいおいてありました。つり道具――それを見て、ヘンリーは、もうひとつのことを思いつきました。

「ねえ、パパ。」と、ヘンリーはいいました。「パパ、近いうちにつりにいく？」

「いくよ。」おとうさんは、赤信号で車をとめました。「グランビーさんのおじさんとふたりで、

九月ちゅうに、いつかサケつりにいこうっていってるんだ。なぜだい？」
「ことしは、ぼくもつれてってくれない？」　ヘンリーは、つとめてなにげなく、おとなっぽい口調でききました。
車は、スーパーマーケットをとおりすぎて、アル・ガソリンスタンドの方へまがりました。
「そうだな。」　おとうさんは、グリーズ台のそばで車をとめながらいいました。
わあーい、いいぞ、いいぞ。アバラーといっしょに車からおりながら、ヘンリーは思いました。おとうさんが、「そうだな。」というときは、なにか特別のことがないかぎり、「うん、いいよ。」という意味なのです。もし、「おかあさんにきいてごらん。」といったのなら、いけないというわけではないけれど、おとうさんとしては、あまりつれていきたくないという意味だったでしょう。でも――「そうだな。」っていったんだもの！
ヘンリーは、自分がボートに乗って、サケ――それもチヌークザケ（マスノスケともいい、サケ科のなかで最も大きい。）をひきあげているところを思いうかべました。自分でつりあげたさかなのそばに立って、写真をとっているところや、ほかの人が、「ええ、そうなんですよ。この子が、あのものすごく大きなチヌークザケをつった、ヘンリー＝ハギンズって子ですよ。」といっているところが目に見えてきました。
おとうさんは、ガソリンスタンドの主人のアルさんと、二言、三言話をして、車をグリーズアッ

プしてくれるようたのむと、ヘンリーの方をむいていいました。
「おとうさんは、これから銀行へいって、二、三、用事をかたづけなきゃならないんだが、おまえいっしょにくるか？　それとも、ここでまってるか？」
ヘンリーは、あんまりむちゅうでつりのことをかんがえていたので、そもそも、なんのためにガソリンスタンドにきたのか、もうちょっとでわすれるところでした。ヘンリーは、グリーズ台のよこにある車を見て、ちょっともじもじしました。もしかしたら、ばかだなってわらわれるかな……。でも、まえからずうっとやってみたかったことなんです。
「あの……ねえ、パパ。車をグリーズ台の上にあげるとき、車の中にいちゃだめ？」
おとうさんもアルさんも、わらいました。
「おとうさんも、子どものとき、おなじことをやってみたくてたまらなかったもんだ。」と、おとうさんはいいました。「おとうさんは、かまわんがね。アルさんが、いいっていうかどうかねえ。」
「わたしのほうは、かまやしません。」と、アルさんはいいました。「ただし、いったん上へあがったら、仕事がすむまでおりてこられませんぜ。わたしは、お客さんがきたら、そっちの方へいかなくっちゃならないから、ちょっと時間がかかるかもしれませんがね。」
「いいよ、ぼくまってる。」と、ヘンリーはいいました。

「それに、上にいるあいだは、車のドアをあけちゃだめだぞ。」と、おとうさんが注意しました。
「あけないよ。」と、ヘンリーは、やくそくしました。そして、もういちど車に乗りました。
アルさんは、車を運転してグリーズ台の上でとめ、それから車からおりて、車を台にとめる車じくのささえにしっかりとめました。アルさんがハンドルをまわすと、車が上にあがりはじめました。
「いっていらっしゃい、パパ。」と、ヘンリーは大きな声でいいました。
車は、ヘンリーを乗せたまま、ゆっくりゆっくり高くなっていきました。ちょうど、まわりに建物がないエレベーターに乗っているようなかんじです。ぼくがこうやっているところを、友だちがだれも見ていないなんて残念だなあ……。
車はとまり、アルさんが、車の下で、グリーズガン（潤滑油をさすための、ピストル型をした道具。）をあててグリーズをさしている、シュッ、シュッという音が、聞こえてきました。
空中から見ると、いろんなものがなんとちがってみえることでしょう！　ヘンリーは、車が台からはなれて、この高さのままでドライブしていったら、どんなにおもしろいだろうと思いました。
「ワン！」
アバラーが、ヘンリーを見あげてほえました。アバラーは、ハギンズ家の車が、そんな空中でなにをしているのか、てんでわからないようでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com